

# なぜ経済学の行為遂行性が問題となるのか：

M. カロンらの所説について<sup>1)</sup>

山本 泰三

- |              |                        |
|--------------|------------------------|
| I はじめに       | V 市場的配置と行為遂行性          |
| II 経済学の行為遂行性 | VI なぜ経済学の行為遂行性が問題となるのか |
| III 行為遂行性の概念 | VII むすびにかえて            |
| IV 科学論の転回    |                        |

## I はじめに

本稿では、M. カロン (Michel Callon), D. マッケンジー (Donald MacKenzie), F. ミュニエーザ (Fabian Muniesa) らが論じる、経済学の行為遂行性という概念について検討する。近年、行為遂行性 performativity という用語の広がりには人文・社会科学の諸分野に及んでおり、当然その用法も拡散している。経済学の領域においても、たとえば瀧澤 (2018) はその現代経済学の概観から示唆される方法論的な考察において、行為遂行性の概念に言及しているのだが<sup>3)</sup>、ここで検討するカロンらの概念および諸研究は、カロンやB. ラトゥール (Bruno Latour) らが展開してきたアクター・ネットワーク理論にルーツを持つ。以下では、まずIIにおいて、経済学の行為遂行性アプローチの発祥を確認し、具体的な事例を紹介する。IIIでは、オースティン以降の行為遂行性概念の系譜を検討する。IVでは行為遂行性概念の導入を促す科学技術社会論の知見を概観する。そしてVで、経済学の行為遂行性と市場的配置を関連づける。VIでは、経済学の行為遂行性を問うことの意味をあらためて考える。

---

[キーワード] 行為遂行性, アクター・ネットワーク理論, 経済学方法論, 市場的配置

2) 本稿は、京都大学デザインスクールDesign Visions・京都大学経済学研究科/経営管理大学院セミナー (2017年11月20日, 京都大学) および進化経済学会 制度と統治部会 (2018年3月20日, 阪南大学あべのハルカスキャンパス) での口頭報告を大幅に加筆修正したものである。報告に際しては、山内裕氏 (京都大学), 宇仁宏幸氏 (京都大学), 中原隆幸氏 (阪南大学), 金信行氏 (東京大学大学院) ほかのみなさまから貴重なコメントをいただいた。記して深く感謝したい。

3) 本特集の寄稿者による研究としてKitagawa & Izawa (2019) も参照されたい。

## II 経済学の行為遂行性

マッケンジーやミュニエーザらが展開してきた、経済学の行為遂行性を問うアプローチは、カロンが編者をつとめた*The Laws of The Markets* (Callon 1998) にはじまるとされている (MacKenzie et al. 2007a; Muniesa et Callon 2009; Muniesa 2014)。これは、おおむね科学技術社会論および経済社会学の立場からさまざまな事例を分析した論文集であり<sup>4)</sup>、アクター・ネットワーク理論 (以下、ANTと略) における言い回しで表現するならば「市場の人類学」の試みである。これが後のCallon et Muniesa (2003) やCallon et al. (2007) などを経てCallon (2013) における「市場的配置」の議論に結実することになる (後述)。さて、この*The Laws of The Markets*の序 (Callon 1998a) においては、経済学と経済の関係が重大な問題として考察されており、事実上その議論によって経済学の行為遂行性という概念が提起されているのである。カロンはその基本的観点を以下のように端的に述べている。「広い意味での経済学は、経済がいかにか機能するかを観察するというよりは、むしろ、経済を遂行し [perform], 形づくり, フォーマットする」(Callon 1998a, p. 2)。カロンにこの着想を与えたのは、Garcia-Parpet (2007) の原著論文<sup>5)</sup> によるフォンテーヌ・アン・ソローニュ地方のイチゴ市場の研究であったようだ (ここでは、新古典派経済学を学んだ人物が電光掲示板を用いる競りでの販売装置を考案し、そのシステムによって、イチゴ生産者の取引行動が、経済理論を信じたわけでもないにもかかわらず変容したことが分析されている)。ただしこの序で用いられている用語はperformおよびperformanceであり、その後のMacKenzie (2003) やMacKenzie & Millo (2003) 以降の諸研究<sup>6)</sup> によってperformativityという語彙がカロンの提示した問題にあてられたといえよう。また、この論集において明示的にperform, performance, そしてperformativeという語を分析ツールとして用いているのがCochoy (1998) であり、この概念が言語哲学者のオースティンに由来すること、その導入はラトゥールとカロンの示唆によるものであることが注記されている。

ここで、経済学の行為遂行性の研究事例として、一般的にもよく知られている排出権市場の創設をMacKenzie (2009) がどのように描き出しているかをみておこう。排出権市場は、経済学が関わったマーケット・デザインの成功例として研究者たちが誇る事例の一つに数えられるが<sup>7)</sup>、マッケンジーによれば、この市場のデザインは「政治そのものである」(MacKenzie 2009, 邦訳p. 7)。

4) Callon (1998) におけるカロンの議論の要点についてはCallon (1999) も参照。

5) Marie-France Garcia “La construction social d’un marché parfait: le marché au cadran de Fontaines-en-Sologne,” *Actes de la Recherche en Science Socials*, no.65, pp.2-13, 1986. の英訳がGarcia-Parpet (2007) である。

6) マッケンジーの金融社会学論については金 (2018) を参照。

7) 排出権市場も含むさまざまな事例についてはMcMillan (2002) を参照。

温室効果ガスの問題は、標準的な経済理論においてはまずは「外部性」の問題として扱われるであろう。ピグー以来の経済学者が奨励した外部性への対処は、直接の規制ではなく、課税による「内部化」であったといえる。一方、コースの定理にしたがえば、取引費用がゼロなら当事者間の取引で問題を処理できる、ということになる。だがもちろんコースの定理がそのまま成立することは通常あり得ない。取引の具体的な手法として、売買可能な許可証の市場というアイデアを提案したのはJ. H. デイルズであった。

1990年にアメリカで二酸化硫黄の排出枠取引制度が設立されることになるのだが、そこに関わった経済学者たちは状況に順応し、たんに研究者として振る舞ったのではなく、活発に政治活動をおこなった。またこの制度の導入の動きはNGOも巻き込んでおり、さらに、排出量の測定システムを作り上げるには技術者および法律家の深い関与が必要だった。その許可証（排出枠）であるが、当初は排出者に売却されず、ほとんどが無償で割り当てられている。各企業はロビー活動によって望ましい配分を得ることができたのである。

やがて環境問題の焦点は硫黄から炭素へとシフトしていく。排出枠取引制度の成功を背景に、アメリカは京都議定書の交渉でこの取引メカニズムの導入を強く主張していたが、ブッシュ政権は京都議定書から離脱してしまい、当初は否定的だったEUがCO<sub>2</sub>の排出枠取引制度を設立した。これには、EUの政治構造ゆえに一律な炭素税の導入が困難だという事情があった。そしてここでも排出枠の配分をめぐる政治が作用していた。

このような問題があってもかかわらず、市場が機能すれば裁定取引によって欧州広域での価格が形成されると期待されていた。京都議定書のクリーン開発メカニズム(CDM)にとって欧州排出量取引制度の存在が不可欠であったこともその理由の一つである。この制度の第Iフェーズ(2005-2007)は「経済的実験」(Muniesa & Callon 2007)として捉えることができる。2006年まで排出枠の価格は上昇していたが、06年4月に大きく下げ、価格崩壊に至った。これは排出枠の過剰配分によるものである。実験で生じたこうした問題が、第IIフェーズ(2008-2012)の状況を変えていくことになる。

排出権市場が機能するためには、煙突から出る排出量が「事実」でなければならないが、煙突から排出されているCO<sub>2</sub>の量は人間の感覚では把握できない。ゆえに市場にとって、度量衡学、つまり標準化された単位や測定手続など測定に関する科学技術が根本的な意味をもつ。たとえばマッケンジーが勤務するエジンバラ大学のボイラー室にあるメーターはCO<sub>2</sub>の排出量を測定しているが、それは欧州広域に広がる測定ネットワークの一部をなしている。この測定ネットワークこそが、欧州排出量取引制度を現実にも可能にしている

物的基礎である<sup>8)</sup>。

マッケンジーによる分析を構成する契機として、複数の理論的アイデア、入り組んだ文脈、経済学者とさまざまなアクター、利害をめぐる折衝、マクロ政治とその不定性、技術的人工物の重要性、などが見出されるだろう。この事例では結果的に経済学の言説が市場として実現したとみなすこともできるが、そのプロセスは決して直線的なものではない。

経済学の「遂行」は多様であり、一つのパターンに還元してはならない。経済学のイデオロギー的な機能もたしかに遂行の一つだといえるが、あくまで一つのタイプである。理論をそのまま現実に当てはめようとするケース<sup>9)</sup>ばかりではないし、その規模もさまざまである。Muniesa et Callon (2009) は、理論的遂行／実験的遂行、心理的遂行／物質的遂行、分散的遂行／計画された遂行、狭い遂行／拡大された遂行、という分類をおこなっている。

### Ⅲ 行為遂行性の概念

Austin (1962) がおこなった、事実確認的言明と行為遂行的言明の区別はよく知られている。前者は、何らかの事態・事実を陳述、記述する言明である。一方、後者の行為遂行的言明は、何かを言うことによって、または何かを言いながら、何かをおこなっている言明である。「言語学において、ある発言が行為遂行的であると言われるのは、この発言が、自らが語る当のものを自ら創り出しているときである」(Muniesa et Callon 2009, p. 289)。例えば、「あなたはこの者を夫／妻としますか」と聞かれて「はい(、誓います)」と答えるとき、まさにその返事、その発話によって、結婚するという行為が遂行されている。もちろんそれは、結婚式という儀礼の進行の中で言われた場合に、であるが、すなわちここでいう行為遂行的言明は、特定の慣習の存在のもとで、状況に即した適切さを必要とする。発言者の意図どおりに行為が遂行されないことは、もちろんありうる。またオースティンが、同じ一つの文が異なる状況において行為遂行的なものとしても事実確認的のものとしても使用されうることを確認し、両者の完全な分離がありえないことを示している点も重要であるといえる。

「行為遂行的」という概念は、その魅力ゆえに——と言ってよいと思われるのだが——人文・

---

8) 欧州排出量制度に関してマッケンジーが主に焦点を当てるのは、排出枠が割り当てられるプロセスであるが、この要約ではいくつかの興味深い論点を省略した。詳しくはMacKenzie (2009) 邦訳pp.19-21, 153-197を参照。マッケンジーは排出量市場の成果について概ね好意的であるようにみえるが、この点について本稿で議論することはできない。

9) かりに、いわゆる市場メカニズムを具体的な制度に実装させようとするなら、おそらくその試みは、メカニズムが望み通り作動するために必要な諸機構が典型的な「市場」理論には欠落している(Muniesa 2014)という問題に直面することになるだろう。それは、状況と無関係に一つの正解があるような問題ではない。

社会科学の諸分野に普及し、転用され、過剰な多義性を帯びるに至っている。あくまでカロン以降の行為遂行性アプローチの特徴を考えるという本稿の関心からみて、Muniesa et Callon (2009) やMuniesa (2014) がリオタールの『ポスト・モダンの条件』(Lyotard 1979) に言及していることは興味深い。リオタールによれば、脱工業化の進行とともに知のステータスに顕著な変化が生じるのだが、このテーマがオースティンをはじめとする言語行為論を援用しつつ論じられていることは言うまでもない。ポスト・モダンとよばれる状況においては、科学的な知を正当化する近代的な理念(メタ物語)は衰退し、科学は自らの「行為遂行性」によって正当化されるようになる。とはいえリオタールの結論は、技術と利潤の連関によって課される遂行性、「知そのものにまで広げられた市場システム」(Lyotard 1979, 邦訳p.163)による正当化に対して、パラロジ(開かれたシステム性、不連続性、局所性、反方法、逆説的なもの…)というモデルを展望することであったが、ともあれ、ここでの行為遂行性という概念は「インプット/アウトプットの関係」とも言い換えられており、ほぼ効率性と等しい意味になってしまっている。行為遂行性よりもパフォーマンスパフォーマンスという語のほうがふさわしい。その点においてリオタールにおける「行為遂行性」の含意は、カロンたちの問題意識からすれば明らかに狭すぎる(Muniesa 2014)。にもかかわらずLyotard (1979) が参照されているのは、それが少なくともコミュニエーザにとっては、経済・社会にとって知の行為遂行性が際立って問題となる歴史的状况を剔抉したという意義をもっているからではないだろうか。すなわち、知が、「主要な生産力」となり、「世界的な権力抗争における主要な、そしておそらくはもっとも重要な賭金」となり、「工業・商業戦略にとって、そして軍事・政治的戦略にとって、新たな領野が開かれている」(Lyotard 1979, 邦訳p.16-17)、そんな状況を。

やはり行為遂行性概念の系譜<sup>10)</sup>の中でその名が挙げられているJ. バトラー<sup>11)</sup>にしても、その方向性はカロンらとは大きく異なる。しかしバトラーにおいては、行為遂行性的な発話とはいかなるものなのかをめぐる諸議論の緻密な問い直しによって、この概念が孕む複合的なポテンシャルが示されているといえる。竹村(2004)にもとづいてButler (1997)の議論をまとめてみよう。バトラーは、発話が行為として機能するには、それを成り立たせる儀式的な慣習が必要であること、すなわち発話行為の時間には歴史性が凝縮されていることを指摘する。すでにふれたようにこれはオースティンにとっての論点でもあったわけであるが、バトラーはここから、発話行為は、発話の前にあらかじめ存在し発話行為をおこなう主体には還

10) また、performやactor、そしてenact (Mol 2002におけるキーワードといえる) というような語の劇場あるいは演劇的ニュアンスは明らかであり、G. H. ミードやE. ゴフマンのドラマツルギーもMuniesa (2014) では参照されている。本稿ではperformに相当する日本語として主に「遂行する」をあてているが、特定の状況において現実性を作り出すこととしての「演じる」というニュアンスにも留意してよいだろう。ただし物質的要素を重視するANTの観点からは、間主観性のみで依拠してしまう議論は不十分だといえる。

11) バトラーの行為遂行性概念の難しさについては森山(2019)を参照。

元されえない、と主張する。一方P. ブルデューはこのオースティンをふまえながらも、発話をめぐる社会環境は権力によって構造化されていることを強調する。バトラーはブルデューに賛同するのだが、権力構造を固定したものとみなしがちなブルデューの傾向を乗り越えるべく、J. デリダのオースティン論を参照している。デリダによれば、発話は儀式的形態をとって反復されることによって行為遂行的な力を持つのだが、コンテキストの決定不能性ゆえに、反復こそが先行する文脈からの断絶をもたらすことになる。バトラーは、デリダがこれを記号そのものの特質とみなす点については批判しつつも、その示唆を手がかりに、先行の文脈に対して不適切な発話が新たな行為遂行的な力を持ちうることを明らかにしている。このような論究は、本稿の議論にとっても示唆的である。行為遂行性は、発話する主体が統御するものというよりは、社会的文脈や権力関係によってその効果が左右されるものであり、かつそこには変容あるいは攪乱の可能性が潜んでいる。

#### IV 科学論の転回

なぜ、「経済」と「経済学」の関係を研究するために行為遂行性の概念を導入すべきなのだろうか。カロンらのいう「経済学」とは、経済学の諸分野、および経営学、マーケティング、会計、統計学などをふくむ「経済(諸)科学」なのだが、ここではさしあたり狭義の経済理論を念頭において考えてみる。社会科学の女王、という言葉が経済学を指していることはよく知られており、標準的な経済学は科学たることを自認しているとされている。仮にそうだとしておくならば<sup>12)</sup>、いわゆる科学者としての経済学者の自己像は、「記述する者」(Callon 2007a, p. 314)であるだろう。それはおおむね、認識する主体と認識される客体が分離されており、かつ、科学的認識は現実を映す鏡である、とする科学観である<sup>13)</sup>。またこれは、人類学者のP. デスコラを引くMuniesa (2014) がいうところの自然主義、すなわち単一義の外在するものとしての自然という思想と相即する。一般に道具主義と評されるM. フリードマンの「実証主義」(Friedman 1953) も、記述としての科学という科学観の一バリエーションであったといえるだろう。フリードマンは、理論における仮定の非現実性を強調することで、認識主体と客体の分離に立脚する。そのうえで、現実の企業が新古典派マイクロ理論のように最適化行動を目指していなくとも、最適化ができなかった企業は結果的に淘汰されることになる…という疑似進化論的な推論によって、理論と現実の一致を確保しようとするのである。しかしながら、

12) 「Lucas [1976] 以後のマクロ経済学の展開については、近年では経済学説史研究者ですら、立場・イデオロギーを超えた進歩であると考えることが多くなったようだ」と吉田(2008)は慨歎しつつ、この状況を批評的に分析している。

13) この認識論的な図式についてはLatour (1999)も参照。また、ロビンズの定義にもとづく経済学の問題構制は、主体—客体という対と人間—非人間という対の二重の組み合わせにもとづいているように思われる(山本 2018)。

この科学観では現実の科学の活動のありさまを十分に捉えることはできない。たとえば、経済学のイノベーションへの関与は、じっさいのところ多様である。だが経済学がおこなうのはあくまで（経済学から切り離された）経済主体の行動を記述することなのだとすれば、イノベーションと経済学の関係を考えることは少々困難にならざるをえない（Callon 2007a）。

つまるところ、科学の活動を、純粋な事実確認的言明をモデルとして理解する必要はない。Hacking (1983) は、科学の実験は現実への“介入”であるということを詳らかにした。はじめからそこにあるものをただ観察するのではなく、入念に構築されたこの介入によって、科学的な事実は産出される。A. モルの表現を借りて言えば、知識とはたんに「実在についての言表」なのではなく、「他の実践に干渉する一つの実践」(Mol 2002, 邦訳p.215) である。ANTをはじめとする科学技術社会論 (STS) の意義は、科学の実践とはいかなるものなのかをさまざまな事例研究によって明らかにしたことにある。それは、科学を認識論的問題として研究するというよりも、ラトゥールらの人類学的な手法のように、実際に行われている諸活動の具体的な追跡を重視する。主体と客体の断絶から出発したうえでその両者が一致しうる方途を探し求めるといったことは問題にならず、たとえば最終的な報告書と調査フィールドがどのような媒介の連鎖によってつながっているのかがたどられる。そこから立ち現れてくる科学の実像は、実験器具、論文のレトリック、資金獲得の手続き、利害の調整などからなる連関である。だがこれはたんなる「社会構築主義」ではない。あらかじめ存在する「社会」が科学のあり方を決定するといった主張ではないからである。人、物質、制度、人工物、テクストなどはいずれもアクターたりうる。ANTは、それらの間の共同作業、そして翻訳のプロセスに着目する。技術の領域と科学の領域、そして社会の領域は切り離せない。むしろ科学の活動がそれらとの関係を織り上げていくとさえいえる (Latour 1987, 2005)。このアプローチからすれば、科学が行為遂行的なものであることはむしろ自明であろう。じっさい、現代の経済学もまた実験を行うのである<sup>14)</sup>。

## V 市場的配置と行為遂行性

経済学が行為遂行的なのだとすれば、「経済」と「経済学」の関係は外在的なものではないということになる。Callon (2007a) は、イノベーションを線型的なプロセス（研究→発明→開発→イノベーション→普及）だとする旧来の見方は、各段階から生じるフィードバック・ループを強調する相互作用的なモデルに取って代わられたと述べている。技術の「源泉」といった観念はあまり有効ではない。代替的なモデルでは、それぞれの段階で基礎研究が関わりうるということがわかる。経済学はいろいろなかたちでイノベーションのいくつかのプロセスに巻き

14) 実験経済学についてはさしあたり Guala (2005)、およびグアラも寄稿している MacKenzie et al. (2007) を参照。

込まれていくのであって、プロセスの外側からその知を適用するのではない。ここでわたしたちは、カロンが行為遂行性と配置の概念を組み合わせて論じていることに留意すべきである。

MacKenzie et al (2007a), Muniesa et Callon (2009), Muniesa (2014) では、知が組織的に動員される後期近代の状況、すなわち再帰的近代化を論じるU. ベック, A. ギデンズ, S. ラッシュとともに、R. K. マートンの自己成就的予言の概念が、行為遂行性概念へと連なる社会学的伝統におけるアプローチの一つとして言及されている。その基本的な形式のレベルにおいてみるならば、経済学の行為遂行性を自己成就的予言の一例として捉えることも不可能ではないだろう。しかしCallon (2007a) は、行為遂行性と自己成就的予言の同一視をはっきり退ける。カロンにとって行為遂行性は、信念が信じられることによってその信念が現実化することではない。なんらかの言明が行為遂行的な効果を生む、あるいはそれに失敗するのは、先行の、および新たな文脈との関わりにおいて、かつその関わりによってである。配置とは、その文脈の具体性であるとみてよい。「私は諸言明と世界との関係を社会的-技術的配置と呼ぶことを好む」(Callon 2007a, p. 319)。経済にかんする社会的-技術的配置の問題は、その後の研究において「市場的配置」として概括されるに至る(Callon 2013 ほか)<sup>15)</sup>。

標準的な経済学や経済社会学に共通する市場像を、Callon (2013) は「市場=インターフェイス」と呼ぶ。それは、事前に存在し相互に独立した需要と供給が遭遇する、厚みのない抽象的な場あるいは空間というイメージである。しかしこの表象は、現実の市場において何が起きているか——需要や供給はいかにして形成され、いかにして出現することになるのか、それらはどのようにして出会い、どのようなやり方で取引するのか、アクターはどうやって計算するのか、価格はどのように決定されるのか、——を明らかにしない。むしろ市場という概念はブラックボックスとなってしまうている。カロンが目指すのは、まさしくANTのアプローチによって、すなわち、問題となる事象がいかにして成り立っているかを、多様なアクターからなるネットワークとして(この場合、市場的配置として)捉えることによって分析し、このブラックボックスをこじ開けることである<sup>16)</sup>。

こうしてカロンは、「市場=インターフェイス」観の狭隘な枠組みにかえて、市場的配置という概念を提案する。それは、以下の5つのフレーミングによって構造化されている。財の受動化、計算的エージェンシーの活性化、市場的出会いの組織化、市場的愛着(接続)、価格の定式化。これらは所与ではなく、様々な手続き、制度、交渉のプロセス、物的装置、等々の連関によって形づくられる。フレーミング [cadrage (仏), framing (英)], つまり枠づけ

15) カロンのいう市場的配置については、北川(2017)、山本(2018)を参照。配置 *agencement* という語の説明としてはMuniesa, Millo & Callon (2007), MacKenzie (2009)も簡便である。

16) 「科学の専門的側面をブラックボックスとしてにおいて社会の影響や偏向を採すのではなく、[...]箱が閉じてブラックボックスとなる前にそこに行く」(Latour 1987, p.21, 邦訳33ページ)。



る行為なのであって（ゆえにそれは氾濫の可能性をも作り出す）、所与の特徴ではない。そしてフレーミングをおこなっているのは、じっさいの諸々のアクターであり、つまりアクターたちの行為によってこそ市場的配置がもたらされるのである。たとえば、計算を行うこと（、そのために事物を計算可能なものにするか、計算する能力を構築すること）によって、その活動や事物が経済的であるかそうでないかがフレーミングされる（Callon 1998a）<sup>17)</sup>。カロンの研究を念頭において展開されるLatour（2005）の議論がここで補助線となるだろう。ラトゥールは、グループ形成は「遂行されている」と述べる。ここでいう「グループ」という語は「中身がなく、規模も内容も設定されていない」（Latour 2005, p.29. 邦訳57ページ）とラトゥールは述べているので、集合的なものごと一般を、ゆえに何らかの社会的なまとまりを指すと考えてよい。別の言い方をすれば、そのまとまりは、行為遂行的に定義される。これが意味するのは、グループあるいは社会的なまとまり（ここに経済的あるいは市場的な事象をあてはめることができる）は、アクターたちによる、まとまりを制作しようとする絶えざる取り組みによって維持されているということ、アクター自身がその定義と再定義に常に携わっているということである。ANTが示すこのような認識を、Muniesa（2014）はプラグマティズムという語彙によって捉え直している。それは、実在性を効果として、意味を行為として捉えることとして要約される。これは、経済という現実についての自然主義的な見方への批判でもある。アクターの行為と無関係にそれ自体で「経済的」であるようなものは存在しない。配置という概念が指し示すのは、配置する／されるプロセスなのであって、出来合いの建築物ではない。

当然ながら、社会的世界の定義と再定義をめぐって行為するこのアクターたちの中には、学者・研究者、学問的言説も含まれている。ラトゥールは、グループ形成において、グループが代弁者を必要とすること、専門的な道具を有する専門家が動員されることを指摘する。「ホモ・エコノミクスという並外れたくくりの輪郭描写に費やされた会話と文章の量について考えてほしい」（Latour 2005, pp.31-32, 邦訳62ページ）。広義の経済諸科学のすべて——会計、マーケティング、統計など——をここで呼び戻すならば、状況はきわめて明瞭なものになるだろう。経済学は、さまざまなかたちで経済のフレーミングに関与している。それが、Callon（1998a）においては、現実を「経済化」することとも表現されているのである。すなわち、経済学の行為遂行性は、市場的配置の内部にこそ位置づけることができる<sup>18)</sup>。

17) Callon et Muniesa（2003）による計算という概念の検討も参照。またMuniesa（2014）は、計算による経済的現実の遂行を分節し、抽象化・価値づけ・資本化として把握する。

18) 「社会的-技術的配置は、それを指し示す（諸）言明を含む。[...] それはちょうど、指示書がデバイスの一部であり、デバイスを稼働させることに関与するようなものである。文脈は、記号論にみられるような言葉と対話者の純粋世界には還元されえない。文脈は、テキストのおよび物質的集合体とみなされるほうがよい」（Callon 2007a, p.320）。

## VI なぜ経済学の行為遂行性が問題となるのか

しかし、経済学が現実の経済に関与してきたことは経済学にとっても自明ではないのか。このような疑念は正当である。少なくとも、理論的概念としてカロンらが掲げていることの中身が社会科学にとってまったく新しいものであるとみなすことは難しいだろう。にもかかわらず、経済学の行為遂行性を問うというアプローチには、興味深い意義がある。

まず、このアプローチはANTに由来するものであり、すなわち科学技術社会論の視角にもとづいているという点である。これは今さらくり返すまでもなく当然のことではある。だが、問題が「経済学」の行為遂行性であるがゆえに、あらためてその意味を考えておく必要がある。経済学にとって、その対象は経済である。経済学の対象が経済だという前提を再確認することは、ほとんどトートロジーでしかないだろう。経済学が見ようとする現実<sup>19)</sup>は経済としての現実である。だから、経済学の現実への関与についていえば、たとえばその典型である経済政策は（、純粋理論にとっては応用的な位置づけかもしれないとはいえ）、それが経済政策である限り、経済システムのあり方そのものにもとづかなければならず、だからこそ、そもそも経済理論の中に組み込まれているべきものであるはずである。一方、科学技術社会論は、テクノロジーと知の、あるいは科学と社会の関係といったような、ある種の境界領域、グレーゾーンを見出す。すでにふれたANTの主要な論点の一つでもあるが、この境界は固定したものでも自明のもでもない。科学・技術・社会の間の関係の「不確かさ」（藤垣 2005）、「不定性」（本堂ほか 2017）こそが、取り組まれるべき問題となるのである。経済学が見るのは経済である、まさにそれゆえに、経済学が経済学たることに自足するならば、経済学と経済の関係を見ること、あるいはカロンのいう「経済化」（そしてその不定性）を見ることは、むしろ容易ではない。目がそれ自身の視線を見ることはできないように、経済学と経済学<sup>20)</sup>の関係は外在的ではない、すなわち経済学の行為遂行性が内在的であるとは、プロセスの不定性に内在しているということなのである。

次に指摘されなければならないのは、経済学の行為遂行性の研究もまた状況の中で、歴史的な文脈の中で提起されている、という点である。それは、すでにふれたようにミュニエーザがリオタールを参照していること、マッケンジーらの研究がいわゆる「金融化」という現象を切開し分析するものであること、カロンが新自由主義に言及することなどを挙げれば十分に理解されうるだろう。その状況は、知による知の生産、あるいは資本蓄積における非物質的なものの意義の増大として特徴づけられる、認知資本主義の趨勢（山本 2016）として規定することもできる。ただしここで直接に問題となるのは、非物質的蓄積それ自体<sup>19)</sup>だけでは

19) Googleは多くの経済学者を雇ってインターネットにおけるマーケット・デザインを研究させ、たとえば検索連動広告の掲載順序の決定に広告オークションの方式を利用している（川越 2015）。また、製品開発コンサルティングの事例分析としてKitagawa & Izawa (2019) を参照。

なく、その蓄積のためのインフラ的次元を構成する知の遂行であろう（L. テヴノの表現を借用するなら、形態への投資）。つまり経済学の行為遂行性の研究は、一言でいえば、新自由主義以降の経済学の変質に触発されている。Muniesa et Callon (2009) や Muniesa (2014) が参照するフーコーが示したように、「政治経済学」は近代の胎動とともに統治の知として生まれてきたのであり、経済学と経済の関係が今に始まったものではないことは自明である。そのフーコーにとって新自由主義は、統治の新たなプログラムとして検討されるべきものであった。それは、規制緩和、緊縮財政、労組への攻撃、といったメニューに尽きるものではない。統治の過剰を批判する自由主義のいわばラディカルな一変種である（アメリカの）新自由主義においては、競争が交換にとってかわり<sup>20)</sup>、人的資本が労働にとってかわるとともに、経済に属さないとされてきた諸領域にまで市場を拡張していくことが目指される（Foucault 2004）。

瀧澤（2018）は、現代経済学の動向を幅広くレビューする中で浮かび上がってきた方法論的な考察において、マッケンジーなどを参照しつつ、経済学の「遂行性」の問題を検討するに至っている。伊藤（2017）や中室・津川（2017）の一般書としての成功は、「実証科学」としての経済学という社会的イメージを強く印象づけるものであったが、瀧澤は経済学の実証科学化ともいべき流れを、行動経済学や実験経済学なども含む、経済学のより大きな現代的変容の一部として捉える。理論的枠組かつ分析手法としてのゲーム理論の発展、そして制度という基礎的概念の回帰とそれにもとづく諸研究の開花が、その変容の主たる原動力である。それらを土台としつつ注目すべき成長を遂げたのが、メカニズム・デザインおよびマーケット・デザインの分野であろう<sup>21)</sup>。川越は、マーケット・デザインのアプローチに対して、F. A. ハ

---

20) 根井（2013）は、経済学における競争概念の変化に関わる興味深い事例を考察している。1960年代末、八幡・富士製鐵の合併のような大型の企業合併がおこなわれたのだが、一部の経済学者の強い反対もあって、大きな論争となった（当初は公取委が八幡・富士製鐵の合併を認めず、約1年半の審判の後、条件つきで認められ、新日鉄が発足した）。根井によれば、当時いわゆる近代経済学者が重要な経済問題について介入的に「発言」することは極めて稀であった。近代経済学者グループが合併に反対したのは、合併によって競争が損なわれるという理由からだったが、それは「完全競争」的な市場観や当時の産業組織論にもとづくものであった。だがその競争概念にイノベーションの促進の役割を与えようとしたことには理論的に無理があったと根井は指摘する。その後W.ボーモルが提示したコンテストパビリティ理論は、コンテストパブルな市場であれば企業合併の規制を行う必要がなくなるという含意を持ち、レーガンの新自由主義的な規制緩和路線を後押しする形になった。状況の変化が、経済学的な言説がもちうる行為遂行的な力の程度を大きく変動させたわけである。「大型合併論争がかりにいまの時点で起こったとしても、「近経グループ」というひとまとまりの集団が大型合併反対の「意見書」を出すようなことはありえない」（根井 2013, p.90）。

21) メカニズム・デザインおよびマーケット・デザインについては坂井・藤中・若山（2008）、坂井（2010）、Hubbard & Paarsch（2015）、川越（2015）を、広範な話題を扱う議論としてMcMillan（2002）を参照。

イエクのいう意味で「設計主義」だとする批判があると述べたうえで、マーケット・デザインは「むしろこうしたイエクの考えの申し子」であるという(川越 2015, p.13-14)。「マーケット・デザインはまさに、何らかの理由で市場が存在しないか、市場メカニズムを利用することが適切ではないような状況において、中央当局や誰か権力者の命令によらずに、家計や企業が分権的に自主的に、社会的に望ましい結果(例えば、効率的な資源配分)を実現するように知らず知らずに導かれていくような誘引を与える配分方式をデザインすること」である(川越 2015 p.39)。これは、Foucault (2004) のいう意味での新自由主義的な統治テクノロジーそのものではないだろうか。McMillan (2002) は明確に、政府には市場の効率的な機能のための環境を確立し維持する責任があるということを強調する。以下の酒井 (2001) の指摘は、この状況を約言するものとなっている。「『国家介入批判』の激しいレトリックにもかかわらずネオリベリズムは、特定の形態の経済的自由が個人の自律、企業活動、選択の形態において実践される領野を拡大するために、一連の組織形態、技術的方法を発明する、あるいは配備することを提起する」(酒井 2001, p.111)。経済学の行為遂行性という問題への瀧澤 (2018) の注目は、このような文脈のもとで理解することができるように思われる。

## Ⅶ むすびにかえて

「一般的に科学は、とりわけ社会科学、そしてここで検討されるケースにおける経済学は、世界を表象することに制限されていない。それは世界を実現し、喚起し、構築するのである(少なくとも特定の規模で、また特定の条件で)」(Muniesa et Callon 2009, p.289)。経済学の行為性遂行性という問題構制は、以下の3点によって特徴づけられるとみなしうる。内在性、すなわち経済学と経済の関係は外在的ではないということ。不定性、すなわち遂行は、それが慣行の反復であれ急進的な改革であれ、不確かさ、攪乱の可能性をとまなうということ。歴史的状況、すなわち新自由主義以降の経済学の変質。

この概念によって、経済学批判という企図は更新されうるかもしれない。自然主義にもとづいて経済理論の非現実性を批判することは、やや奇妙な疑問を引き起こす。ある理論が非現実的であるがゆえに間違っているなら、それは現実は何の力も持てないはずではないだろうか(Muniesa 2014)。ここから、カロンの「ホモ・エコノミクスは現実に存在する」(Callon 1998a, p.51)というテーゼが出てくることになったと考えることができる。つまり、経済学が非現実的であろうがなかろうが、現実が多かれ少なかれ経済学によって構築されているではないか、ということなのだ。だがこれはカロンの分析の無批判的な性格とみなされ、批判(Miller 2002など)を浴びることになった。カロンの叙述はやや性急すぎたのである。しかし重要なのは、このアプローチが可能にする視座であろう。人がホモ・エコノミクスになる、あるいは「人的資本」として主体化されるのだとすれば、それは資本主義が孕む問題の解消を何ら

意味するものではなく、むしろそこで惹起される複雑な問題の分析が必要である。また経済学が、その実証性にもとづく科学として、いわば「工学的」に（瀧澤 2018）動員されるのだとすれば、むしろその遂行における不定性（これは政治性でもある）が、公共的に開かれなければならない。

人文・社会科学的な知が学問領域から離れて用いられることはもはや珍しいものではなく、それらについての研究も現れている<sup>22)</sup>。とりわけ現代資本主義の動向を考えるならば、経済学の行為遂行性という問い、その諸研究は、大いに示唆的であるように思われる。

## 参考文献

- Austin J.L. (1962) *How to Do Things with Words*, Oxford University Press. (坂本百大訳『言語と行為』大修館書店, 1978)
- Butler J. (1997) *Exitable Speech: A politics of the performative*, Routledge. (竹村和子訳『触発する言葉』岩波書店, 2004)
- Callon M. (ed) (1998) *The Laws of the Markets*, Blackwell Publishers.
- Callon M. (1998a) "Introduction: The embeddedness of economic markets in economics", in M. Callon (ed) *The Laws of the Markets*, Blackwell Publishers, pp.1-57.
- Callon M. (1999) "Actor-network theory: the market test", in Law J. and Hassard J. (ed) *Actor Network Theory and After*, Blackwell Publishing, pp.181-195.
- Callon M. (2007a) "What does it mean to say that economics is performative?", in D. MacKenzie, F. Muniesa & L. Siu (eds) *Do Economists Make Markets?*, Princeton University Press, pp.311-357.
- Callon M. (2007b) "An Essay on the Growing Contribution of Economic Market to the Proliferation of the Social", *Theory, Culture and Society* 24 (7/8), pp.139-162.
- Callon M. (2013) "Qu'est-ce qu'un agencement marchand?", in M. Callon et al., *Sociologie des agencements marchands*, Presses des Mines, pp.325-479. (北川亘太・須田文明訳「市場的配置とは何か」上・中・下, 経済論集 (関西大学), 66(2)・(3), 2016, 67(1), 2017)
- Callon M, Lascoumes P. and Barthe Y. (2009) *Acting in an Uncertain World: An essay on technical democracy*, translated by G. Burchell, MIT Press.
- Callon M., Millo Y. and Muniesa F. (eds) (2007) *Market Devices*, Blackwell Publishing.
- Callon M. et Muniesa F. (2003) "Les marchés économiques comme dispositifs collectifs de calcul", *Reaseaux* 122, pp.189-233. (須田文明・山本泰三訳「計算の集合的装置としての経済市場」四天王寺大

---

22) 伊藤泰信 (2017) は、人類学におけるエスノグラフィの手法がビジネスの現場で用いられている状況を整理している。古川 (2017) は、経営学の「PDCAサイクル」がいわゆる「大学改革」に導入され、経営学的なもとの含意からも逸れた形で用いられている状況を批判的に分析している。また、山本 (2015) の事例も、経済学の行為遂行性にかかわるといえるかもしれない。

- 学紀要 64, pp.345-374, 2017)
- Cochoy F. (1998) "Another discipline for the market economy: marketing as a performative knowledge and know-how for capitalism", in M. Callon (ed) *The Laws of the Markets*, Blackwell Publishers, pp.194-221.
- Foucault M. (2004) *Naissance de la biopolitique: Cours au Collège de France (1978-1979)*, Gallimard / Seuil. (慎改康之訳『生政治の誕生』筑摩書房, 2008)
- Friedman M. (1953) *Essays in Positive Economics*, University of Chicago Press. (佐藤隆三・長谷川啓之訳『実証的経済学の方法と展開』富士書房, 1977)
- 藤垣裕子 (編) (2005) 『科学技術社会論の技法』東京大学出版会
- 古川雄嗣 (2017) PDCAサイクルは「合理的」であるか, 藤本夕衣・古川雄嗣・渡邊浩一 (編) 『反「大学改革」論』ナカニシヤ出版.
- Garcia-Parpet M.-F. (2007) The Social Construction of a Perfect Market: The Strawberry Auction at Fontaines-en-Sologne, in D. MacKenzie, F. Muniesa & L. Siu (eds) *Do Economists Make Markets?*, pp.20-53.
- Guala F. (2005) *The Methodology of Experimental Economics*, Cambridge University Press. (川越敏司訳『科学哲学から見た実験経済学』日本経済評論社, 2013)
- Hacking I. (1983) *Representing and Intervening: Introductory topics in the Philosophy of Natural Science*, Cambridge University Press. (渡辺博訳『表現と介入』筑摩書房, 2015)
- 本堂毅・平田光司・尾内隆之・中島貴子 (2017) 『科学の不定性と社会』信山社
- Hubbard T.P. and Paarsch H.J. (2015) *Auctions*, MIT Press. (安田洋祐監訳・山形浩生訳『入門 オークション』NTT出版, 2017)
- 伊藤公一朗 (2017) 『データ分析の力 因果関係に迫る思考法』光文社.
- 伊藤泰信 (2017) エスノグラフィを实践することの可能性: 文化人類学の視角と方法論を実務に活かす, 組織科学 51(1), pp.30-45
- 川越敏司 (2015) 『マーケット・デザイン: オークションとマッチングの経済学』講談社.
- 金信之 (2018) 経済社会学における遂行性アプローチの検討——ドナルド・マッケンジーの経験的研究を中心に, 日本社会学会第91回大会 (甲南大学) 報告
- 北川亘太 (2017) 訳者解題 (ミッシェル・カロン著, 北川亘太・須田文明訳「市場的配置とは何か」[付録1]), 『経済論集』(関西大学) 67(3), pp.90-105.
- Kitagawa K. and Izawa R. (2019) "Advancing dialogue in service-dominant logic: Collective reframing supported by framed arrangement", 経済論集 (関西大学) 68(4), pp.157-182.
- Latour B. (1987) *Science in Action: How to Follow Scientists and Engineers Through Society*, Harvard University Press. (川崎勝・高田紀代志訳『科学が作られているとき』産業図書, 1999)
- Latour B. (1999) *Pandora's Hope: Essays on the Reality of Science Studies*, Harvard University Press.

- (川崎勝・平川秀幸訳『科学論の实在』産業図書, 2007)
- Latour B. (2005) *Reassembling the Social: An Introduction to Actor-network-theory*, Oxford University Press. (伊藤嘉高訳『社会的なものを組み直す』法政大学出版局, 2019)
- Law J. and Hassard J. (1999) *Actor Network Theory and After*, Blackwell Publishing.
- Liotard J.-F. (1979) *La condition postmoderne: Rapport sur le savoir*, Paris, Ed. de Minuit. (小林康夫訳『ポスト・モダンの条件』書肆風の薔薇, 1986)
- MacKenzie D. (2003) "An Equation and Its Worlds: Bricolage, Exemplars, Disunity and Performativity in Financial Economics", *Social Studies of Science* 33, pp.831-868.
- MacKenzie D. (2007) "Is Economics Performative? Option Theory and the Construction of Derivatives Markets", in MacKenzie D., Muniesa F. and Siu L. (eds) *Do Economists Make Markets?*, pp.54-86.
- MacKenzie D. (2009) *Material Markets: How economic agents are constructed*, Oxford University Press. (岡本紀明訳『金融市場の社会学』流通経済大学出版社, 2013)
- MacKenzie D. and Millo Y. (2003) "Constructing a Market, Performing Theory: The Historical Sociology of a Financial Derivatives Exchange", *American Journal of Sociology* 109, pp.107-145.
- MacKenzie D., Muniesa F. and Siu L. (eds) (2007) *Do Economists Make Markets?: On the performativity of economics*, Princeton University Press.
- MacKenzie D., Muniesa F. and Siu L. (2007a) "Introduction", in MacKenzie D., Muniesa F. and Siu L. (eds) *Do Economists Make Markets?*, pp.1-19.
- McMillan J. (2002) *Reinventing the Bazaar: A Natural history of markets*, W. W. Norton & Co. (瀧澤弘和・木村友二訳『市場を創る』NTT出版, 2007)
- Miller D. (2002) "Turning Callon the right way up", *Economy and Society* 31 (2), pp.218-233.
- Mol A. (2002) *Body Multiple: Ontology in medical practice*, Duke University Press. (浜田明範・田口陽子訳『多としての身体』水声社, 2016)
- 森山至貴 (2019) 複数の置換可能性——パフォーマティビティ概念をめぐって, *現代思想* 47(3), pp.145-183.
- Muniesa F. (2014) *The Provoked Economy: Economic reality and the performative turn*, Routledge.
- Muniesa F. and Callon M. (2007) "Economic Experiments and the Construction of Markets", in D. MacKenzie, F. Muniesa & L. Siu (eds) *Do Economists Make Markets?*, Princeton University Press, pp.163-189.
- Muniesa F. et Callon M. (2009) "La performativité des sciences économiques", in P. Steiner, F. Vatin (ed) *Traité de Sociologie économique*, Presses Universitaires de France, pp.289-321. (須田文明・山本泰三訳「経済学の行為遂行性」四天王寺大学紀要 62, pp.476-506, 2016)
- Muniesa F., Millo Y. and Callon M. (2007) "An introduction to market devices", in Callon M., Millo Y. and Muniesa F. (eds) *Market Devices*, Blackwell Publishing, pp.1-12.

- 中室牧子・津川友介 (2017) 『「原因と結果」の経済学』ダイヤモンド社.
- 根井雅弘 (2013) 『経済学の3つの基本』筑摩書房.
- Prasad P. (2005) *Crafting Qualitative Research: Working in the Postpositivist Traditions*, M.E. Sharpe.  
(箕浦康子監訳・町恵理子ほか訳『質的研究のための理論入門』ナカニシヤ出版, 2018)
- 酒井隆史 (2001) 『自由論：現在性の系譜学』青土社.
- 坂井豊貴 (2010) 『マーケットデザイン入門』ミネルヴァ書房.
- 坂井豊貴・藤中裕二・若山琢磨 (2008) 『メカニズムデザイン』ミネルヴァ書房.
- 竹村和子 (2004) 訳者あとがき：いかにして理論で政治をおこなうか, J. バトラー著・竹村和子訳『触発する言葉』岩波書店, pp.279-295.
- 瀧澤弘和 (2018) 『現代経済学』中央公論新社.
- 山本泰三 (2015) 経済学教育の標準化に対する学生の反応：フランス, アメリカ, イギリスの事例, 四天王寺大学紀要 61, pp.367-378.
- 山本泰三 (編) (2016) 『認知資本主義』ナカニシヤ出版.
- 山本泰三 (2018) アクター・ネットワークの認識論／存在論：予備的検討, 創造都市研究 17・18, pp.35-51.
- 吉田雅明 (2008) マクロ経済学史の憂鬱, 専修経済学論集 40(3), pp.217-231.

(2019.2.13受理)